

読書を楽しむ！

岡田 芳治(化学生命工学科)



『うふふな日々 / あさのあつこ 著 / PHP 文芸文庫 2016』

岡田の担当、2回目です。前回に続いて好きな言葉の紹介です。今回は人生感についてです。

五木寛之さんは、次のように述べています。『いい人生とは何か。そんな定義があるはずはなく、またその基準をつくってはいけないと思います。たとえば人生に望むものが多い人は、常に充足することがない。いつも不満を抱えているものです。いらぬ欲を張らずに、身の丈に合った生き方をしている人は、心穏やかに暮らすことができる。たとえ余所様から貧しく見られているとしても、本人は良き人生だと思えることができる。そういうことではないでしょうか。』

また、井上靖さんは、次のように述べています。『努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語る』。大きな夢であっても、その実現に向かって今やれることがあり、心の中にワクワクするような希望があればいいのだと思います。本当に実現したい気もちがあるのなら、その方法を調べ・考えつくせば、そのプロセスや道筋も今やるべきことも見えてくるのではないのでしょうか。

前置きが長くなりましたが、今回紹介する本は、あさのあつこさんの「うふふな日々」(PHP 文芸文庫、2016年)というエッセイ集です。

これ、いいなと思った言葉(入学式などで学生に話しているネタ)を幾つか記して読書ガイドにします。もっとたくさんいい言葉があります。探してください。

「第一章 季節はめぐる 美しいもの」の中から『人生の女神は落ちてくる牡丹餅を棚の下で待っているような人間には決して微笑まない。自らの意思と意志で前に進もうとする心意気のない人間には一瞥も与えてはくれないのだ。』

自分がしたいことは何か。誰かが与えてくれるものではなく、自分で考え、見つけて前へ進もう！

「第二章 思考はめぐる 六カ月って」の中から『どのような稚拙なものであれ思考することは尊い。思考し、思考し、思考を重ねる。雨滴が岩を穿つように、少しずつ自分の精神を掘り下げていく。風景のように劇的に変化しなくても、僅かずつ美しく成長する。そんな大人になりたい。』

焦ることはない。思考を重ねて、少しずつ深みのある大人になっていくんだ！

「第三章 人生はめぐる 疼きとともに」の中から『人生とはおもしろい。どこでも、いつでも、逆転の機会やきっかけは転がっているものだ。人間は可能性に溢れているなんて薄っぺらい戯言はいわないが、可塑性に満ちた存在であることは確かだと思う。人は変わりうる。自らを自らの力で変えることができるのだ。』

そうだ。しくじったなと思ったら、その原点に戻ればいいんだ！

「第三章 人生はめぐる いい人生？」の中から『ああ、そうか……万が一「いい人生」なんてものがあるとしたら、それは自分に背かないことに繋がっているかもしれない。自分に背かない。自分をごまかさない。自分を欺かない。若いうちは、ちょっと難しいかな。だけど、ぎりぎりのところで踏みとどまってほしい。若いあなたたちの周りには、たぶんいろいろな声が渦巻いている。「これが正しいのだ」「これがいい人生なんだ」「こう生きれば、間違いはない」等々。だけど、気をつけて。紛い物が多いから。聞くべき声はいつだって、自分の内にある。「私はそれを欲しているのか」「私は何が大切なのだ」「わたしは、どう生きたいのだ」。自分に問い続け、自分で答えを探す。(中略) 聞くべき声はいつだって、自分の内にある。モノサシは自分で作る。それで、自分を計りたい。そんな自前のモノサシをちゃんと持っている人をホンマモンの大人というのだ。若いときから耳をそばだて、自分の声を聞いてください。モノサシをせっせと磨いてください。後悔のない人生なんてありえない。足掻かず生きている人なんていない。「いい人生」の定義なんて存在しない。人、それぞれが自分のモノサシを手に入れて、計り、創りあげるしかないのだ。』

若い君たちには、自分の心の声に耳を傾け、自分のモノサシを手に入れて、惑わされることなく、せっせと磨いてほしい。